

大阪府立緑風冠高等学校A地区コンクール参加作品

「ファンタジックでありたい」

作 木村光寿

「登場人物」

女1 元看護師・心理カウンセリング経営
女2 大学院生・心理カウンセリング従業員
女3 母・クラスメイト・バイト先の同僚
女4 高校生
男1 父・クラスメイト・バイト先の上司

第一場

暗い舞台上に一筋の光が差し込み、中心に女4が立つ。

女4 「人は、無条件で肯定される資格を、生まれてから一体いつの間になくしてしまふのだろう。少なくとも、今日まで生きのびてきた私の中で、そんな記憶は皆無なわけで」

1

女3の声 「ほら、いつまでも赤ちゃんじゃないでしょ。わがままばかり言わないで。いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だからわがままばかり言わないようにする」

男1の声 「ほら、お前はまだ子どもなんだから。言われたことをちゃんと聞くようにしなさい、いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だから言われたことをちゃんと聞く」

女3の声 「ほら、いつまでお母さんの後ろにくっついてるの？こっちだって忙しいの。一人で遊んでいて、いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だから一人で遊ぶ」

男1の声 「ほら、いつまで遊んでばかりいるんだ。これからは勉強頑張らないと駄目だろう。しっかり勉強しなさい、いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だから、遊ばないで勉強頑張る」

女3の声 「ほら、いくら頑張ったって結果がでないと意味ないでしょう。世の中はね、最後には点数、結果で判断されるの。頑張ったのなら、その結果を見せてちょうだい、いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だから結果を出す」

男1の声 「ほら、もう終わった結果をずっと持っていても仕方ないだろう。きちんと反省しなさい。できたことに満足していないで、できなかったところを見直すんだ、いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だから、きちんと反省して完璧を目指す」

女3の声 「ほら、たまたま満点だからって満足しちゃ駄目でしょ。競争は死ぬまでつづいていくんだから。油断しないで、頑張り続けなくちゃ、いい子だから」

女4 「うんわかった。私、いい子だから油断しないで一生頑張り続ける」

やや、間

女4 「きつとこれって、どこにも誰にも悪意はなくてむしろ正しいことだらけで、だから余計に絶望的で。私はきつと、ずっとこの世界から逃げられない。それはわかってるんだけど、でも、生まれてから今日まで私の記憶にあるのはそんなことばかりで、それは今もこんなに鮮明に残っていて」

女3の声 「ほら、」

女4 「うんわかった！」

やや間

女4 「ずっと限定的にしか肯定されず、かといって逆らうことも無視することもできない勇気のない私にできたのは、耳をふさいで目を閉じて、湧き上がる心を殺して、望まれた返事を返すことだけでした。そうすれば私は、問題のない、いい子でい続けられたのです」

女3の声 「本当にありがとう。あなたが大事なところでしつかり言ってくれたから、なんとかうまくやってこれたみたい」

男1の声 「いや、仕事にかまけて育児を任せっきりにしてしまい、申し訳なかったと思ってる。全部、お前のおかげだよ。毎日細かく目を配ってきたじゃないか」

やや間

女4 「課されたノルマをクリアして、自分は賢明なのだとうぬぼれながらも、望まれた答えを探しつづけて。言葉だけじゃなく表情も態度も動作も、全部。閉じ込められた中国語の部屋で食べるように辞書を読み、必死に紙切れを返し続けていた私が知覚していったこと、それは」

女3の声 「人は、私の本音ではなく期待した反応を求めているということ」

男1の声「人は、私の気持ちなど私ほどには興味がないということ」

女4 「それはつまり、言葉なんて会話なんて何の意味もないんだという確信でした。この身体が大きくなって、響いてくるこの声が家族から学校に、世間にひろがっていつても、それは、変わりませんでした」

女4 「その結果、いつの間にか、私は生きることをやめていきました。ク

オリア置いてけぼりで、表情も動作も口調も、望まれた通りに振る舞える。けれども、まだどこかで、これは本当の私ではないと、心が軋んでいるようで。不完全な哲学的ゾンビ。だから私は」

女3の声「だから私は」

男1の声「だから私は」

女4 「人との会話に絶望して、心が通じあう奇跡を嘲って、この中国語の部屋で辞書とにらめっこし続ける。軋みながら、震えながら。

もし、こんなにも無様に歪んだ私を満たしてくれるものがあるならば、本当に私を誰かと結びつけてくれる術があるならば。そのとき私は、初めて、生まれるのではないかと。哲学的ゾンビから人間になれるのではないかと、そう思っているのです」

第二場

女1「うざいから一々その小さな擦り傷見せて可哀想なフリしてんじゃねえってんだよ」

舞台が明るくなる。ソファで寝ていた女1、起き上がって衝動的に手元にあったクッションを投げつけている。そこは女1のオフィス。上手側にパソコンやプリンター、書類棚の置かれたオフィス机があり、書類が乱雑に置かれている。下手側にはソファとテーブルがある。その更に下手には、移動可能な木枠が置かれている。

女2「割りと理不尽にパワハラしてきますね」

女2、やや離れた位置で投げつけられたクッションを受け止めている。

女1「あれ、もう朝か。マジか」

女2「ごめんなさい、ないんですか」

女1「いやだって、なんかすごいだるい夢みてさ。ありきたりで、おおげさで、そのくせ自分にとっては切実で、典型的なアダルトチルドレン。んなもん見てるこっちはうんざりするだけでしょっていう」

女2 「動機は行為を正当化しないって知ってますか？あーもう、またほったらかし」

と、女2机の上を整理しはじめる。

女1 「いや、でもやっぱ、皆好きでしょ、理屈より動機っていうか感情っていいか。殺人事件のニュースにはブーイングでも、仇討ちの物語は拍手喝采だよ」

女2 「そうやって都合よく感情利用してると、どんどん低きに流れていきますよ。感情なんて気分屋、あてにならないんですから」

女1 「あてにはならないけど無視もできないんだよ。現にほら、私、そのせいでまるつきり動くことができません」

女2 「まあ、だから社会には時間があって仕事があってルールがあんじやないですか。強制的に人を動かすシステムが」

女2が女1の背中を押して舞台の上手側に移動し、オフィス机に向い合っている。

女1 「で、じゃあ、今日のお仕事は？」

女2 「猫探しの依頼と職探しの依頼と自分探しの依頼」

女1 「なんか、探してばかりだね」

女2 「今の時代、とりあえず皆あると信じてますからね、なくしたものが」

女1 「全部カウンセリングじゃなくない？」

女2 「自分探しは心理カウンセリングでしょう」

女1 「それ違うもん。もう一応今、回復期だからコンサル入ってて、心理教育ぽいの。自分探しとかいって、結局趣味に延々つきあわされるんだよ。

山登りとか、絵描いたりとか、農作業とか」

女2 「健康的じゃないですか」

女1 「なんかさ、うち、誤解されてない？一応心の悩み相談って看板あげてるんだけどね。何でも屋じゃないんだから」

女2 「ていうかそれ、心理教育の範疇こえてますよね。コーディネートでもないし、なんだろ」

女1 「臨床心理目指す院生様は流石に違いますなあ。いちいち現場でそんな判断して仕事選別できる余裕ありませんよ」

女2 「いや、ある意味凄いなって思ってますよ。そこまで付き合うのって」

女1 「馬鹿にしてるだろそれ」

女2 「いえそんな」

女1 「どうせ私みたいな看護師あがりのなんちゃってカウンセラーは、結局、肉体労働から開放されないんだなあ」

女2 「でも昔よりマシなんじゃないですか？一応」

女1 「まあ、この時間まで寝られるようになったのは、とりあえず自営業なつたおかげかなあ。親の遺産そのままの職場だけだ」

女2 「良かったじゃないですか」

女1 「その代わり貯金すごい勢いで消えてってるけど」

女2 「あー・・・。そういうえば、えっと」

女1 「おう？」

女2 「いや、前から聞きたいなと思ってたんですけど。なんでわざわざ看護師からカウンセラーなろうと思ったんですか？そんな、収入厳しいとか、絶対わかってるのに」

女1 「それ、真面目に聞いてる？」

女2 「一応」

女1 「じゃあ真面目に答えてあげようかめんどくさいけど。現実的なのと理想的なのとどっちがいい？」

女2 「どっちも」

女1 「まあ簡単にいえば、看護師の殺人的な仕事量にギブアップしてなんだけどね」

女2 「なんだ、やっぱり」

女1 「一度やってみてよほんとに。医療現場の実状知っとけ」

女2 「いや、一応インターンでいきましたけど。色々きついんだろうなっくらいで。でも別にじゃあ、カウンセラーじゃなくても、事務行くとか」

女1 「そこはちよっと、理想入るの」

女2 「ほう」

女1 「結局ね、うちののしてることってさ、対処療法なんだって思っちゃったんだな」

女2 「ほう？」

女1 「うちの場合、割とすぐ外来から病棟移されたし、だから基本ずーっと同じ入院患者さんみてるのね。毎日やばいくらいしんどいんだけど、やっぱその中で、やりがいさ、あるわけじゃん。患者さんが治って、退院していくのを見ると」

女2 「ああ、はい。そこは、まあ」

女1 「まあ治らないことも多いんだけどさ。でも、そういうことしてる中で、ああこれって結局対処療法しかできてないなあって気づいて」

女2 「え、いや、一応完治というか一定の目処つけて出すんでしょ、入院患者の人って」

女1 「それがねえ、数ヶ月とか半年くらいしたらまた戻ってくる人、いたりするのよ、入り浸るっていうか。だいたい男。おっさんとか、おじいちゃんとかね」

女2 「ああ、へえ。そうなんだ」

女1 「結局、そのほうが楽なんだろうね。一旦社会から切り離されちゃうと。リスタートするのが面倒くさくなるばい。訪問看護とかしてても。刑務所じゃないんだよこっちは」

女2 「あー、だから。対処療法」

女1 「うんまあ。むかつくじゃん。なんか、自分がそれこそ身体削って看護して、必死になってやってるのにさ。それが全部否定されるってことは。ほんと陳腐な言い方だけど、人間治すつてのは身体だけじゃないんだ、精神状態なんだから、まあそういうのがずっと消えなくてね」

女2 「そっか、うん、はい」

女1 「まあとりあえずそんなわけで、人間相手って楽しいけどしんどいんだ。

色々削られるし、お互い」

女2 「なんか、私が言うのもあれですけど。それがやりがいだったりしないんですかね、やっぱり」

女1 「否定はしないけど。やっぱりほら、優しさって余裕だから。だからこれから臨床心理目指すんなら、気をつけといたほうがいいよ、自分の残り精神力」

女2 「覚えときます」

女1 「まあ、そんなわけで人間相手にするのは今日の私には無理かなあ」

女2 「じゃあ猫探しやりますか？」

女1 「それ違う意味でパスしたい。大変なんだよ、その手のタイプ。一度やっただけど鳥で」

女2 「あ、そうなんだ」

女1 「それが精神の安定につながるとか言われたらさあ。別料金でやりますよ開業したとこだったし。知り合いの興信所にも手伝ってもらって。結局その時はだめだったけど」

女2 「あー」

女3、下手より登場し、木枠を舞台の中央に移動させ、落ち着かない様子で下手のソファーに腰掛ける。

女1 「人間と違ってしがらみ少ないからね、動物は。すぐに今の居場所捨てられちゃうんだ」

女2 「そう聞くとなんか、少し羨ましいですね」

女1 「なんかだいたい社会人擦れしてきたね、最初の頃は目を輝かせて仕事してたのに」

女2 「とても良いお手本がいらっしやってもう三年もご一緒させて頂いてるんで」

女1 「あーもうそんななあ。三年って、学生なら卒業、社会人なら転職の目安くらいだね」

女2 「学校は自動で卒業できちゃったんですけど、社会人はなかなかそうもい
かなくて」
女1 「まあ、だからだいたい社会人は約四十年ほど退屈を繰り返す道を選ぶ
わけだ」
女2 「ところで、いいんですか？なんか来客みたいですけど」
女1 「あれ、うそ、まじで。アポ入ってた、この時間？教えてよもう」
女2 「いやないですけど。断ります？でも来ちゃってますしもう」
女1 「そんなん呟かれて無駄に評判下がるのもなあ・・・どう、やってみない
実地で臨床心理」
女2 「単独でカウンセリング絶対しないようになって言ってたくせに」
女1 「マニユアル人間だなあ。そこらへんはこう、柔軟に判断しないと」
女2 「勝手に行動したらしたで指示待ってていうくせに」
女1 「当たり前だろ、上司は常に都合よく動く人間が欲しいだけなんだから」
女2 「そんなの分かってますけどね、とりあえずどうするんですか？」
女1 「ああもう、わかったって」
と、女1、木柵を通過して下手に移動。女2はお茶の準備をする。

第三場

女3 「あの、えっと、すいません」
女1 「あ、はい」
女3 「あの、えっと、すいません、えっと」
女1 「あ、いえ、別に、全然」
女3 「いえ、ちょっと、」
女1 「あ、大丈夫ですよ、えっと」
女3 「いや、ご迷惑でしたら、その」
女1 「いえいえ、そんな、全然もう」
女2、お茶を運びつつ木柵を通過してやってくる。
女2 「このわざとらしい10秒位のやりとりってまるで不要なんだけど必要な
んだよね、社会で生きてくとね」
女1 「ああ、そうかそうか。すいません。そうですね、回してもらってたんで
すよね、病院からの紹介で、こっちに」
女2 「そんなツテあったんですね」
女1 「一応前に働いてた時からね。どうぞ、おかけください」
女3 「はい」

女2、お茶を出す。

女1 「えっと、だいたいはお話伺ってるんですけど、一応確認させていただき
ますね。お子さんがなんか、外出されなくなったそうで」

女3 「ええ、はい」

女1 「勿論その、我々もいくつかそういうケースは扱ってるんですけど、だいたいまあ、焦らないほうがいいんですね、ゆっくり、時間を置いて見守るというか」

女3 「そんな、だって、それであの子が取り残されたらって思うとやはり、親としては心配で」

女1 「ええ、はい」

女3 「おっしゃることは本でもテレビでも色んな人が無責任にいつてますけど、でもやっぱりそれで、変なレッテルがついてしまうと。そんな、高校生なんて面倒くさい時に。せつかくここまで、普通にやってこれたのに」

女1 「まあまあ、そういうケースが多いうただけで、我々はもちろん依頼があれば早期解決を目指しますから。それで、期間はいくらですか。1ヶ月ですか、1年ですか」

女3 「それが、お恥ずかしい話なんですけど、もう、2日になるんです」

やや間

女1 「お母さん」

女3 「はい」

女1 「言いましたよ、学校。そんなに信用できないですか教育機関。今時臆病になってますから、過剰なくらい対応してくれまますよそういうの」

女3 「言えないです、そんな、恥ずかしい。こんなくだらないことでこれまで順調に進めてきたルールを外れたら」

女2 「もうそんなルールもあんまり信用できないんですけどね」

女3 「それでもやはり、自分が所属してきたサイレントマジョリティから外れたくはないですから」

女1 「まあまあ、いづれにせよ。そんなにまだ、心配なさる必要はないんじゃないですか。遅れてきたささやかな反抗期みたいなもんだと思えば」

女3 「でも、今までこんなことなかったんです。早いうちに手を打ちたいんです。子どもは自由にさせるべきとか言い続けてたはずなのにまさか自分がその立場になったら子どもが少しでも普通じゃなくなるのが怖くてたまらないんです」

女2 「私、まだ母親って体験はないんですけど、こんななっちゃうもんなんですね」

女1 「わかりました、勿論こっちは否む理由なんてないですよ。お引き受けします。とりあえずはその、子どもさんの、面会ではないんですけどやはり、実際に様子を伺えたらと思うんですけど」

女3 「勿論、お願いします。もう早くなんとか、助けてもらえたら」

女1 「わかりました。それでは訪問の日程ですけど」

女3 「じゃあ、お越しいただけますか。さほど遠いところでもないのです」

女1 「え、もう、今すぐですか？」

女3 「はい、もう、一刻も早く。すぐ近くですので」

第四場

3人、立ち上がる。女3が木枠を舞台奥へ移動させる。と、そこは家の玄関になる。

女3 「どうぞ、こちらです」

女1 「わあ」

女2 「潔いくらい近いですね」

女3 「多分、今日はまだ主人もいると思います。一応、伝えてありますので」

男1、下手から登場。下手のソファに腰掛ける。3人は木枠を通って男3と向かい合う。

女3 「あなた、こちらが」

男1 「ああ」

女3 「私もそんな、不安だけど、何も無いよりはましかと思って」

男1 「うん、まあ、しょうがないよ。そんな、変に力を入れて有名どころにいったら、それこそ誰にみられるかわからないから」

女3 「ええ。すいません、私、少しあの子の部屋見てきますので」

女3 下手奥に退場。

男1 「どうも、わざわざ」

女1 「いえいえ、どうも、はじめまして、よろしくおねがいます」

男1 「いや、こちらこそ。よろしくおねがいます」

女2 「男性だと流石に初対面で10秒も無意味なやりとりしないってどうか、それすら面倒くさがるんだよね」

男1 「本当にすいません。人様に迷惑かけるなということで、ずっとちゃんとやってきました子だったんですが」

女1 「いえいえ、そんな、別に」

女2 「まあ、まだなんといっても子供なんで、不安定なこともいろいろありますから」

男1 「ですがそれは、最低限、生きていくうえでのルールでしょう。この国で」

女1 「たしかに、ですね。おっしゃるとおりだと思います」

男1 「それではすいませんが。仕事がありますので、宜しくお願います」

男1は木枿を舞台の中央奥に動かし、デスクに腰掛け、パソコンを起動して仕事を始める。

女1 「なんていうか、とりあえず、幸せな人ね」

女2 「そうですか？」

女1 「だって、人に迷惑かけずに生きていけるなんて本気で信じてるんだもん」

女3、下手奥より登場。

女3 「お待たせしました、どうぞこちらへ」

と、舞台中央の木枿の前に二人を案内する。

女2 「随分丈夫なドアですね」

女1 「この中にいるんですか娘さん」

女3 「はい、もう、思春期になってからはずっと。自分の部屋に鍵をつけてくれとあって。私もそれは、年頃の子ならみんなそんなものかと思いましたが」

女2 「まあ、とりあえず家に帰って部屋の中に入れてくれれば安心ですもんね」

女3 「ええ、もう、一生そうしてほしくらいで」

女1 「まあでも、そうもいかないですよ。一応社会に出ていかないと。なかなか難しいですね」

女1、木枿をノックしながら

女1 「すいません、いいですか？ 私たち、お母さんの知り合いで、ちょっとお話ししたくて来ました。今、時間もらえますかね？」

上手の男1、紙を一枚プリントアウトして木枠の前に置く。女3、そのプリントを取り上げると、「お断りします」と大きく印刷されている。

女1 「なんですかこれ」

女3 「前からそうなんです。あの子、いつだったか家ではなるべく発音をしたくないって言い出して、できればメールやメッセージで伝えたいそうなのですが、私はそういうのわからないので」

女2 「会話のない家庭ですか、文字通り」

女1 「あの、いやせめてさ、せっかききたんだから声きかせてもらえないかな？ なんでもいいからさ」

再度上手の男1、紙を一枚プリントアウトして木枠の前に置く。女3、そのプリントを取り上げると、「必要ありません」と大きく印刷されている。

女1 「徹底してるな。生活、これですとできてるんですか」

女3 「ええ、誤解も聞き間違いもなくなくなるし、お互いの要件ははっきりわかるから、何も不都合ないんじゃないかって、主人なんかも」

女1 「なんかも、ある意味尊敬したくなるご家庭ですね。まあでも、どうしましょう？ こういう場合、本来なら時間を空けて、本人が話す気になるまで見守っていくんですけど」

女3 「そんな時間は」

女1 「ですよ。そんな優しいさっていうか余裕ないですもんね、我々」

女2 「えっとじゃあ、私たちもそうだったメッセージなりメールっていうコミュニケーションなら、話してもらえらるってことですかね？」

女1 「いやいや、そうかあ？」

女2 「本人になるべく寄り添ってあげないと。ちょっと、わからなくはないんです。あの、あちこち下品に貼りまくってる悩み相談室のポスターなんかでも、電話よりメールでの連絡が圧倒的に多いんですって」

女1 「そりゃ知ってるけど。その分遊びとかいたはずらも圧倒的に多いんだってね」

女2 「まあ、こんな見た目だけ平和な国ではそういうツールだったことです、ネットって。さっきと同じ文面でメッセージ送ってみますね」

女2、端末を操作する。覗き込む女1、3

女1 「なんで送り先のアドレスわかるの？」

女2 「現在地からのメンバー検索で、拒否られないかぎりはとりあえず一方的にメッセージは送り付けられます。そこらへん、無神経というか。』と
りあえずこれなら会話してくれませんか?』送信と」

再度、同じ手順で紙が出てくる。女3、紙を拾って

女3 「『いや、そういう問題じゃないし』」

女2 「まあ、そうくるよね」

女1 「自分でも信じてなかったのかよ」

女2 「だってそんなのでいけたら今時そこらじゅう会話しないで端末ポチポチばかりしてますよ」

女3 「割と多いですけどね、電車とか」

女1 「(腕まくりしながら) もういい、奥さん、肉体言語でいいですか。とりあえず本人部屋から出すってことで、時間もなし手段もないし、ていうか我々に期待してたことってそういうことですよね」

女3 「そのとおりです」

女2 「うわ、解決投げちゃった」

女1 が木枠にむかって体当たりをする。

そのまま、女1 は部屋に雪崩れ込み、女3 と女2 が続いて入る。同時に男1 は上手に退場。

女1 「みため頑丈なくせして強く出たら意外ともろいんだな、この扉」

女2 「まさに思春期の女子みたいですね」

女3 「あ、修理費用は結構ですのぞ」

女1 「そりゃありがたいですね。で、なんだこりゃ、入ってきたら机とパソコンにプリンター、これだけ?」

女2 「シンプルすぎる部屋ですね。ほかの部屋への扉とかは?」

女3 「いえ。親の知らない空間を広げて不安を増やしたくないんです。本人もそれが心地いいみたいで、いつも休日はどこにも行かずここにいたのに、どこに・・・」

女1・2、机や周囲を探し回りながら

女1 「なんだかガラスの動物園だな」

女2 「あのモデルの最後知ってます? 最後ロボットミーで一生病院生活なんですよ」

女3 「なんですか?」

女2 「いいえ、なんでも。朝の話じゃないですけど、こんなとこだと、動物と人間、どっちのほうに制御しやすいんでしょうね」

- 女1 「檻の中になったら、人間ってそんなに動物と変わらないみたいよ、ミルグラム実験とかスタンフォード実験とか見ると」
- 女2 「まあ、あれは檻の中における他者との関係性に対する絶望であって、そもそもここには本体以外の他者とか存在する余地なさそうですね」
- 女1 「なんでもいいけど、その本体が見当たらなくて、これだけ？」
- 女3 「以前は、大量に本なんかも買い与えていたのですが・・・」
- 女2 「きつとそういう、自分につながるものは、全部処分したんでしょう、二日前に。その上でこんなおもちゃを置いて私達と遊んでくれたんです」
- 女1 「何、どういうこと」
- 女2 「このPCマイク、音声拾えるんですよ。で、それを利用したプログラムミングして、トラップにして。多分本人はもう、この近くにはいないと思います」
- 女3 「そんな、まさか」
- 女1 「なんか、まるで自分でもやったことあるような言い方だけど。一般人にもわかるよう詳しく説明してもらっていい？」
- 女2 「別に、そういうわけじゃないんですけど。すでに音声を認識して内容を理解し、最適解を返すシステムはモバイル端末ですら利用可能なんです。マイクから我々の音声を拾ったら、そのプログラムを利用して、あとはそれを文字化してプリントアウトしてただけですね」
- 女1 「やるわね高校生」
- 女3 「じゃあ、私があの子のものだと思っていたここ最近の反応は全部、機械が勝手にやっていたってことなんですか」
- 女2 「そういうことでしょう。ていうかこれやる時点で私たちの知能ってその程度って思われてるんですよ」
- 女1 「ムカつくわね高校生」
- 女3、プリンタに残った紙を手取る
- 女3 「（紙を見せて）『実際、リアルの会話なんてそんなもんですよ』」
- 女1 「小賢しいわね高校生」
- 女3 「成績は、割と優秀だったので」
- 女2 「別に褒めてないです、ていうかそれってかえって質悪いです。能力って人格の欠陥覆い隠しちゃうんで」
- 女3 「気づかない欠陥なら私が死ぬまで隠し続けておいてくれたらよかったですけどね」
- 女1 「で？どうしましょ、連れ出しに来たらそもそも存在しなかったわけですけど」
- 女3 「どこにいったんでしょ、むしろどこに行けたんでしょあの子が、親が認めた場所以外で」

女1 「おそらくですけど、どこでもよかつたんだと思います。どこへ行きたいのでもなく、ただ変化するというか反抗してみるところか。なんらかのきっかけで、この場所から消えてみせることが彼女の一番のモチベーションだったでしょうから」

女3 「なんで、そんなことを。せつかくこれまで何の問題もなくやってきたのに」

女2 「いい加減、そうやって与えられた社会に合わせて新しい辞書読むのがめんどくさくなつたんじゃないですか。そう思うと、人間もやっぱり捕まえてくの大変ですね」

女1 「まあ、思ってたよりアクティブでワイズな感じね。単なる引きこもりとは一味違うわ」

女2 「引きこもりかと思ってたら、行方不明だったと」

女1 「引きこもり行方不明・・・引き不明？」

女2 「生き埋めみたいですね」

やや間

女3 「まさか、そんなことにはさすがになつてないかと思うんですけど」

女1 「いや、勿論、勿論そうですよ、それは」

女3 「さすがに困ります、そんな、そんなになつたら。私のこれまでの人生全否定じゃないですか」

女2 「そうでしょうね、そうですね」

女1 「とりあえず、まだなんとも言えないんですけど」

女3 「後2日でお願いします。世間に季節外れのインフルエンザでおせるのは、そんなに長くないんで」

女2 「え、インフルエンザならもう少し長引かせてもおかしくないんじゃないですか？」

女3 「え、制限時間ギリギリまであなた達を頼りつきりにできるほど信頼してると思ってるんですか？」

女1 「なんかイラツときたからかえろつか。すいません、どうも長時間失礼しました。なるべく早く、ご報告するようにいたしますので」

女3 「はい、せいぜい宜しくお願いします」

女2 「失礼します」

女3、女1、上手に退場。

第五場

女2 以外の場所が暗くなる。女2、パソコンを立ち上げる。
女4 が下手から登場。

女4 「やっぱり落ち着くんですよね、一番。直接誰とも顔会わずにそうしている時が」

女2 「初対面で随分無神経にフレンドリーなんだね」

女4 「別に、悪いとか言っていないですよ。私もそうなんです。気持ちわかりそうだから、見に来てみたんです」

女2 「人との会話に絶望して逃げ出したたくせに、こんなになっただらやたら流暢にしゃべるんだ」

女4 「言いたいことを配慮と虚栄でつつみくるんでごまかして、結局何にもならない会話をするのが、そんなに大切なんですか？」

女2 「だからってそれを放棄して、スタンプや顔文字まみれの不細工なコミュニケーションにすがればいいの？あなたがいうごまかしてね、それはそれで生きていくための技術なの」

女4 「分かっていますよ、今更。ずっとそんなことばかり教育されてきたんだから」

女2 「じゃあ結局、あなたのしたことってそういう現実のコミュニケーションについていけなくなったってことのSOSじゃない。違う？」

女4 「思ってたとおりで、すごい。教科書どおり、大正解の分析過ぎてこっちが恥ずかしいくらい」

女2 「些事にかかずらわって逃げようって？」

女4 「だけじゃないですよ。ほんとには気付いているんですよね。こんな夜遅く自分の部屋に帰ってきて、必死になって私のこと調べ続けている理由。今度は私のほうから、分析してあげましょうか。私、院どころか大学に行ったことすらないですけど」

女2 「ふん」

女4 「まあ、それだけ執着してもらってるのは光栄ですけど。それだけ、私のこと気に入らないんですよね？明らか。で、人が人を嫌いになるのって、願望憎悪か同属嫌悪に大別できるってこない知ったんですけれど。この場合、後者ですよ。もう、わかりやすすぎるくらい一緒だなんて。だから興味出て、わざわざお邪魔してみたんですけれど」

女2 「相手を単純に分析して優位に立ったつもりになるのは、自分が未熟で単純な子どもですってアピールしてるだけだって知ってた？」

女4 「自分で気づいてないんですか？冷静じゃないの。全部自分見てるみたいでムカつくんでしょ？私のことが。必死になって部屋の外に出て、でもやっぱりここに戻ってきて。安心してしまう自分が心の奥底にあるから、それを否定したくて必死なんじゃない？」

女2 「現在進行形で世界に怯えてるあなたなんかと一緒にしないでほしいんだけど」

女4 「現在進行形は同じじゃないですか。人の心に寄り添うって言って、ほんとは自分が安心したいから。自己分析は不安だけど他人の分析してる時は辛くないですよ？外に出て会話して勉強して試験受けて院入って働いて、あなたのために努力して、結局何も根本は変わってない。そうやって自分を誤魔化したいだけなんだ」

女2 「まあそれなりに賢らげな様子はあの部屋を見ればわかっていたけど。なるほど、そんな程度の浅い知識と精神年齢だから、専門知識も相手への配慮もない幼稚な分析を恥ずかしげもなくさらけ出せるのね」

女4 「今度は自分が些事にかかずにわかってませんか？大人って都合いいんですね、昔は自分がそれを憎んでたくせに」

女2 「そこまで共通理解ある自信があるんならいい加減私の感情だってわかってるでしょ？消えろ」

女4の明かりが消え、女2が一人残される。やや間

女2 「お前なんかに戻るもんか」

女2、パソコンに向かう。暗転

第六場

女1と女2、ともにデスクに向かって作業をしている。女2はやや苦しそうな様子。

女1 「珍しく調子悪そうね、なんか」

女2 「すいません。別になにもないんですけどね。夢見が悪くて」

女1 「おや、流行ってるのかな、それ」

女2 「かもしれないですね。ていうか影響うけたのかもしれないですね無意識のうちに」

女1 「そーいや夢は無意識の集合体とか一応心理学でやったな」

女2 「それ、めちゃくちゃ古典的ですけどね。なんか、無意識で皆つながってるって、やっぱユングは宗教入ってますね、ちよっと」

女1 「私そんなに真面目にやったわけじゃないけど、そういう影響はやっぱ、だれでもあるでしょ、心理学やってたら。東洋なんかそればかりじゃん」

女2 「まあ時代が違うから宗教の位置づけ違うのかもしれないけど、そんなに私、他人と共通点あるとか思わないんですけど」

女1 「自分だけは他人と違うの？若いねえ。それはそれでできっと事実だよ、人間そんなに誰だって大して違いはないってのは。むしろフロイトのがやつぱおかしいでしょ、なんでも下ネタに結びつけすぎ」

女2 「まあ言ってる自分がコンプレックスあったのかなって感じですかね。でもまあ、それだけじゃないにしても、まだ自分の欲望とそれの制限とか、その根本の発想は実感わいてきたんで、だんだん」

女1 「まあ、人間は誰しもそうやって社会的にいきていくんだけどさ。それは複雑に人格を使い分けていかないといけないから、ある意味穢れていくって見方もあって。純粋な頃は人間不信になるよね、大人は、皆汚いとか思っちゃったり」

女2 「今回のケースも、そういうことなんですかね」

女1 「そんなめんどくさい世の中でやってる苦労も少しはわかってくれりゃいいんだけど。でもまあ、一人でいたいのかつながっていたいのかってのは結論でないからね。どっちもあるもん、そんなの」

女2 「ああ」

女1 「周りと同じじゃない、特別でありたいと思うけど、周りからはずされるのは怖い、一人ではいたくないって、まあそんな都合よくいかないんだけどね」

やや間

女1 「ていうか、この件さ。いいんだよ？そんなに熱心にやらんかったって」

女2 「何ですか？」

女1 「ある意味、自分の問題だと思ってるんですよ。大学行かなくなっって、部屋に閉じこもって、そこから、これまでの」

女2 「結構こっちに考えさせる余裕なく断定しますね、心の問題なのに」

女1 「そこらへん、カウンセラーといいつつ元看護師だからね。リハビリは、寄り添って本人に考えさせてたら、現実無視して甘えた答え出し続けていつまでも傷は治らない時もあるんだ」

女2 「もうやめましようよ、この話題」

女1 「そっちから振ってきたくせに。やめたっていいけどさ、結局自分の問題だから。なんにせよ、やるなら、決意しとくっていうか、強い気持ちは必要。覗き込んだら覗き返されるからね、心って」

女2 「ありますよ、決意は。この引き不明さんを見つけて、一回ぶんなぐりたいていう。とりあえず予感なんですけど、それで多分、私はぐっすり安眠できそうなんです」

女1 「お、珍しく気が合ったね」

女2 「ほんとです、ね、頑張りましょう」

女1と2、机に向かい合ったまま仕事をする。やがて2人、下手に移動してソファーに座る。女2はその際、木杵を舞台前に動かす。

第七場

女1 「とういわけで」

女2 「とういわけで」

女1 「まあ、一通りやってみたけどねえ。身辺調査。知り合いの興信所まで協力してもらって」

女2 「あ、そんなのしたんですか。ずっこい」

女1 「そこはほら、分業しなきゃ。やってく上で作業化するって大事なんだよ」

女2 「なんか、つまらなくないですか。やりがいつか」

女1 「知ってる？兵器工場の労働者ってね、完全に分業体制で完成品見ないの。自分が何作ってるかとかその先考えたら精神衛生上まずいから」

女2 「逆に車とかだと、多少効率落ちても見せるんですよ。モチベーション的に。意味のない作業の繰り返しだと認知すると、発狂しちゃうから」

女1 「この場合どっちがいいのかね。ま、とりあえず打ち合わせとこうか、お互いの情報」

女2 「ですね」

女1 「じゃあ一つ目。ベタすぎるけど、学校ね」

女2 「聞き込みするのとか、よくやれましたね。最近そういうの厳しくしてるぽいのに」

女1 「厳しいのは中だけでね。ちよつと外になったら責任外だもん、個人情報も全然余裕」

男1、女3、上手より登場

女3 「えーと、あの子って別にそんな、悪いところないよね」

男1 「うん、割と頭いいし。静かだけど、別に話さないとかじゃなくて、ノー卜借りたりしてたし」

女3 「ああうん、私も。結構いい人だよ。落ち着いた感じっていうか。嫌じゃないけどな」

男1 「うん。そんな暗いキャラでもないですよ？ちゃんと普通に会話してるみたいだし、なあ？」

女3 「話振ったらちゃんと喋ってたよ」

男1、女3、上手に退場

女1 「いじめられてたとかではないみたいじゃん」

女2 「ですね。そこらへん、自信あるんでしょね。対人関係」

女1 「まあ、学校カーストは理解してれば対処しやすいし。うざくてしつこいだけで。じゃあ次、バイト先ね。ていうか、高校生の範囲って狭いから、調査ほんと楽でいいね、猫に比べて。学校と家とバイト先だけでほぼ完結っていう」

女2 「その狭さが苦痛でもあるんですけどね、多分。逃げ場が見つからないから」

男1、女3、上手より登場

男1 「ああ別に、問題無かったですよ。最初はぎこちなかったけど、慣れてきたらやることちゃんとやるようになったんで」

女3 「いい子ですよ、ほんと。大人しめだけど。シフト時々かわってもらってるし、休憩中もお菓子とか一緒に食べたりとか。ラインバトンもすぐ返してくるし。あ、ホーム画面、こないだ私のにしたげたんです、可愛いやつ」

男1、女3、上手に退場

女2 「ま、想像ついてましたけど。放棄してるって感じですよ。コミュニケーション」

女1 「でもまあ、話してなくはないんじゃない」

女2 「だからまずいんですよ」

女1 「何が。とりあえずやってけるみたいじゃん」

女2 「とりあえずで、やっていけるってわかっちゃうから、多分社会はそんな程度だって確信しちゃうんですよ。空気づくりも含めて。それこそコンピュータにプログラミングさせてしゃべらせてるのと同じレベルで」

女1 「対人関係では、必要なことしか話さない、話す必要はない、か。まあ、仕事するってのはえてしてそういうものだけだね」

女2 「じゃあ、今も、そうなんですかね？」

やや、間

女1 「なんだか、発展的な情報ないね、結局どこいったかの手がかりなしなんじゃん」

女2 「なんとなくなくなった理由は憶測ででっち上げられそうですけど。とりあえず、向こうに報告しときましょうか」

女1 「よろしく。でまあ、その後搜索とかまで依頼してきてくれたらいいんだけど」

女2 「また肉体労働追加ですかね」

女1 「いやでも、さすがにそれこそ興信所いっちゃうだろうなあ。警察はいやだろーし」

女2 「でしようね。あ、あと私、あのPCから彼女のネット上での行動ログ追跡中なんですけど」

女1 「そんなの当然消しちゃってるでしょ」

女2 「あの地域周辺の端末も含めて同時にチェックしています。ある程度強引につなぎ合わせれば見えてくることがあるかなって。存在することと同様、人間は一度行動しちゃったら、永久にその軌跡は消えないんですよ」

女1 「忘れられる権利なんて滅茶苦茶ほしいもんね。」

女2 「まあ、それだって忘れられるだけで消えるわけじゃないんですけどね」

女1 「いづれにせよ、とりあえずこの件は今日はこれでいいんじゃない、お疲れ様」

女2 「なんか今日も夢見が悪いような気がします」

暗転

第八場

舞台上、女1がソファーに寝ている。女4が上手から歩いてくる。

女1 「なんかよくわからない確信があるんだけど、やっぱりあなたが、だよねえ？」

女4 「はい、そうですね」

女1 「なんとなくわかってたけど、夢枕に立つってのは趣味が古くない？そんな話は古今東西あるみたいだけど、ここまできてあなたが見いだしたのはそんな陳腐なファンタジー？」

女4 「人の理想を追い続けていったら、結局太古から変わらないところにあるのかも知れませんね。現実の他者に絶望して、『ここではない、今、どこか』が欲しくてしようがなくて、昔の人は夢や神話にそれを求めて。まだ見ぬ土地を探し続けていきました。私たちは今、それに近いことをネットという科学で実現させています、中途半端に」

女1 「夢は無意識の集合体で、だからあなたと私はつながっているって？なるほど。でもね、夢ならいつか覚めるもの、ネットも同じ、どっかで外に出てやってかなくちゃいけないの、皆。現実から逃げ出して行方不明になつて、これからどうするつもり？」

女4 「それについては、すいませんでした。家、明日には帰ります。お騒がせしました」

女1 「おいやけに素直だな」

女4 「なんていうか、やっていける自信というか、確信ができたんです。現実ってもう、そんなに価値とかないんじゃないかなって。今まで結構、それにおびえて、親にも社会にも気に入られるように努力してきたんですけど」

女1 「ずいぶん頑張っている子してきたんだ」

女4 「でも、思ってた以上に世の中の人って頭悪くて、自分以外に興味ないんだなって。私の本心なんてどうでもよくて、だから扉の向こうにいるのが、プログラムでも気づかない。そんなに必死になって怖がる価値なんてないんだって」

女1 「ほう。だからまた、取り繕った日常を繰り返すの？また逃げ出すんじゃない？」

女4 「大丈夫ですよ。普段の私の様子、もう見たんでしょ？現実の会話だってそれなりにうまく演じられます。多分現実の会話なんてその程度のもので。私、プログラム程度の頭はありますよ」

女1 「あなたはまだ、本当の社会と向き合っていないでしょう？生まれながらに与えられたごく狭い世間と、その中にある空気に怯えきっているだけでしょう？」

女4 「それはきつと、生き方の問題です。社会がこの国に成立する前、人々はみんな、自分の半径50km以内の中で産まれて、その世間の中で生きて、死んでいった。それが全てだった。そこから先に出ることが、決して幸福ではないと知っていたから」

女1 「それだけ？たとえそうだとしても、まだ現実とネットが並存しているこの過渡期中で、あなたにはやり過ぎ以上の現実が必要でしょう」

女4 「むしろ、現実により過ぎ以上の価値なんてあるんですか？自分で言うていて、それ信じてますか？」

女1 「本気で誰かと殴り合いの喧嘩したことある？他に何もいらなから一緒にいたい人がいて、幸せをわかちあえたりだからこそ絶対に許せなかったり一生忘れられない経験をしたことは？」

女4 「全部妄想か、願いたいなものですよ。自分の気持ちを押し付けて、伝わったって思いこんで、結局勘違い。それを繰り返すたびに傷ついてきたくせに」

女2 「そんな台詞が出るんなら、自分でわかるでしょう。あなたはゾンビになんてなれない。だって、この世界じゃこんなに生きようとして、認めてもらいたくてもがいているじゃない？」

舞台上に光が差し込み、女2が現れる。

女1 「ずっと出番待ってて考えてた台詞それ？もうちよつとなんかなかったの？」

女2 「すいません、この子のログ追跡相当大変だったもんで。でもおかげでいぶん元気になりましたよ。私たちが追っていたのは、出来そこないゾンビじゃなくて、自分を無邪気に無神経に吐き出ししてる可愛い女の子だってわかったんで」

女2が端末を立ち上げると、第一場のやりとりが再現される。

女3の声 「ほら、いつまでも赤ちゃんじゃないでしょ。わがままばかり言わないで。いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だからわがままばかり言わないようにする」

女4 「でも、私にはしたいことがある」

男1の声 「ほら、お前はまだ子どもなんだから。言われたことをちゃんと聞くようにしなさい、いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だから言われたことをちゃんと聞く」

女4 「でも、私だって都合がある」

女3の声 「ほら、いつまでお母さんの後ろにくっついてるの？こっちだって忙しいの。一人で遊んでいて、いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だから一人で遊ぶ」

女4 「でも、私のことも忘れないで」

男1の声 「ほら、いつまで遊んでばかりいるんだ。これからは勉強頑張らないと駄目だろう。しっかり勉強しなさい、いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だから、遊ばないで勉強頑張る」

女4 「でも、私は勉強が好きじゃやない。褒められるのが好きだけ」

女3の声 「ほら、いくら頑張ったって結果がでないと意味ないでしょう。世の中はね、最後には点数、結果で判断されるの。頑張ったのなら、その結果を見せてちょうだい、いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だから結果を出す」

女4 「でも、私もし結果を出せなかったら、ごめんなさい」

男1の声 「ほら、もう終わった結果をずっと持っても仕方ないだろう。きちんと反省しなさい。できたことに満足していかないで、できなかったところを見直すんだ、いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だから、きちんと反省して完璧を目指す」

女4 「でも、私は完璧じゃない、機械じゃない」

女3の声 「ほら、たまたま満点だからって満足しちゃ駄目でしょ。競争は死ぬまでつづいていくんだから。油断しないで、頑張り続けなくちゃ、いい子だから」

女4の声 「うんわかった。私、いい子だから油断しないで一生頑張り続ける」

女4 「もうやめて」

女2が端末を閉じると、やりとりが止まる

女4 「最低ですね。自分がされたいやなこと、人にするなっていつもあなた達がりすましていつてるくせに」

女1 「でも同時に気づいてるでしょう？悪いことってやっちゃいたくなることで、しかもすごく楽しいの。特に人の心理なんか、好奇心だらけ」

女2 「はつきりしましたよね。あなたは、この世界に現実から逃避する先のフアンタジーを求めて生きている。その事実だけで、しかもそれが私たちに知られてしまつて。あなたには相当屈辱でしょう？」

女4 「それは、そんなに非難されることなんですか？誰だつて現実からの逃げ場が欲しい。あなた達だつて。家族？恋人？お酒？薬？そっちのほうが、ずっと不健全」

女2 「他が悪いからつて、自分が悪くないことにはならないからね。そんなこと、小さな子どもでも言われてる」

女4 「いずれにせよ、今あなた達のしてることつて何なんですか？私のこと、今もこれからもどうだつていいくせに、仕事だからつてだけで知られたくない気持ちを弄んで」

女1 「ずいぶん逃げ腰になつてきたもんだ。まあ確かに、カウンセリングつて仕事だから今執着してるし、この子の今後とか、最終的には保証できないんだけどさ」

女4 「他人の意見なんて、なんだつて。究極的には水掛け論の押し付けになつちゃうんですよ。パーセンテージの問題だけで。こんな話だと、特に。いいですよ、お互いに妥協しましょう？これからはもう、ずつとうまくやりますから」

女2 「形勢が悪くなつてきたからつて、そう簡単に逃がしてもらえらなと思うなよ。そんなの期待してないんだから、こっちは」

女4 「しつこいなあ。なんでそこまでこだわるの？あなた達はそれで、お仕事終わりじゃないですか」

女2 「認められる訳ないでしょう。現実のコミュニケーションの可能性をあきらめちゃつて、本音は手で触れられない世界でしか手に入らないなんて結論は」

女4 「それは貴方の自分勝手でしょ」

女2 「ええ、そうよ。前にあなたと会つたとき。自分を抑えられなかつたのは、私の中のあなたに怯えたから。何年も前のことなのに、未だに過去を乗り越えていないと思ひ知らされた。それだけね、心の傷つて治らないの、たぶん一生。それでも、その傷を引きずつてやつてきた自負がある。だから、私は、私自身の欲望で、過去の自分を見ているようなお前が気に

食わない。その存在を許さない。絶対に、ここから引きずり出して連れて戻る」

女1 「力づくで？」

女2 「それじゃ駄目なんです。それって、伝わることを完全に諦めた方法だから。彼女の絶望を、もっと深くさせるだけなんです」

女4 「ねえ。コミュニケーションンって、道みたいなものですよ。良し悪しじゃなくてそこを使う人がいるかどうかだから。ただの過渡期なだけです。かつて電話がそうだったように、きつとこの先の未来では、こんな話、成り立たなくなってます」

女2 「今の、そして私たちに見えるこれからの話をしているの。残念だけど、この世界はまだ脆弱で、それだけにすぎりきるわけにはいかない。この世界を否定する、一番の理由、それは」

女4 「それは？」

女1 「それは？」

女2 「自分以外、だれもないこの世界に絶望したから」

女1 「なんだそりゃ」

女2 「駄目なんです。結局この世界のコミュニケーションンって、何にもしてないんだって、気付いたんです。だれとも話してないし、話せないんだって」

女4 「最後にすぎるのが、あなたの個人的な体験ですか？」

女2 「あなたもいったでしょう、意見なんて押しつけだって。そのとおり。私は、私でしかないし私の経験しかもっていない。でも、だからって伝える可能性をあきらめていない。それだけがあの日から今日まで生きてきた価値かもしれないのだから」

音楽が流れ始める

女2 「あなたと同じだった過去の私は、現実のコミュニケーションに絶望して、でも自分に価値がほしくて承認欲求の中でもがきつづけて、この世界にはそれがあると、この世界はすべてだと思いついて。けれども、科学者メアリーだって部屋から出てきたときと叫ぶの。自分は本当は、あの世界で何もわかってなくて、コミュニケーションすらしていなかった。本当のコミュニケーションはこんなに暴力的で感情的で圧倒的で、だからそれをくれる現実の世界の日々は、かけがえのない価値があるんだって。だから、聞いて。かつての私が、そして今のあなたが感じているこの世界の素晴らしさは、それは本当は、勘違いだから。家族でも友達でもない誰かに、でも確実に生きていてどこか違う空間にいる、その誰かが、いつか救ってくれるファンタジーを信じていたかったんでしょう」

女4 「同じだったくせに。ただ家族が倒れて慌てて出てきて結局救えないまま死んじゃっただけでたまたま脱却した人がえらそうに」

女2 「そう、でも私はそのことを後悔していない。あなたが、そして私が手に入れて勝手に絶望していた知識も感情も表情も、クオリアを伴わない偽物だったから。今、こうなってそのことがはっきりとわかる」

女4 「本物とか偽物とか、あなたに決める権利なんてあるんですか？それが必要かどうかなんて、私にしか分からないのに、私にすら分からないのに、あなたも親も社会も、わかったような顔で押し付けてこないで」

女2 「わかるよ。私も同じことを言ってたから。でもね、この外に広がる世界は、もっと広くて、もっと絶望的。けど、だから救われたりもするの、私がそうだったように。こんなゆるやかに滅びゆく国に生まれたあなたには、そのことを知る権利と義務がある」

女4 「そんなもの欲しくない」

女1 「そりゃ誰だってねえ、欲しくないんですわ。でもまあ、人間として生きるってのは残念ながら、群れの中で他人の嫌なもんぶつけられながら、なんとか生き延びていくってことみたいらしいよ？こっちは苦しいんだけどさ」

女4 「自分が苦しいから、私にもそれを押し付ける？」

女1 「まじでむかつくなお前。そうだよ、そのとおりだよ！お前一人だけ逃がしてたまるかかってんだよ！」

女4 「自己満足ですね。結局。あなたもあの世界も、自分の欲しいものだけ」

女2 「そうだね。でも、思い出してみてよ。あなたはあの世界で、これだけ自己満足をぶつけられた？」

女4 「はあ？」

女2 「無理でしょう？この世界では他人の自己満足に対して無関心でいられるから。無理でしょう？ブラウザを閉じればすぐリセットできるこの世界は、傷つかなくて優しいけれど、誰も救えないし変えられない。あなたはずっと、あなたにとって人間に見える壁に向かってお話ししてるだけ」

女4 「この壁の中には、実際に同じ人がいるの。私と同じ人がいて、私と同じに悩んで、私と気持ちを共有できる、本当の人がいるの」

女1 「おー必死になってきた」

女2 「それは事実、そうでしょう。でも、多分あなたはそんなものはほしくなかったし、この世界に同じ人なんて認めていなかった」

女4 「そんなことない。私はここで、初めて人とつながれた」

女2 「それは人じゃない、あなたが都合よく人だと思っ込んでいたもの」

女4 「違う」

女2 「あなたも自分で気付いていたはず。だって」

女4 「だって？」

女1 「だって？」

女 2 「気づかなかった？この世界の優しさは、いつでもリセットできるからって。思わなかった？この世界にあふれている絶望の声を抱きしめてあげられなくて、ただ眺めるしかなくってもどかしいって。そして感じなかった？いざ自分に寄り添おうとする声を訪れた時、勝手に私に触れてくるなって怒りと恐怖を」

女 4 「あなた達人はそうやっていつも人を見降ろして、自分が高いところにいようとする」

女 2 「都合よく子どもに戻るなよ。だから、あなたはコミュニケーションなんかしたくなかったんだ。ただ自分を無条件で肯定して欲しいだけ。それすら本当は必要なくて、ただ自分の言葉が誰かに伝わったと錯覚できれば良かっただけ」

女 4 「おめでどう。自分の症状がそれだけ述べられれば完璧ですね」

女 2 「だから、あなたは誰にも何も伝えられない。誰も変えられないし認められない。傷つくことと傷つけられることに敏感で臆病で、都合のいい世界に閉じこもり続けているままだから」

女 4 「まるで今のあなたたちのように、無意識に傲慢に近づいて踏みにじついていく、そんなことがそんなに立派？ここは、私がようやく見つけた場所。それすら奪う権利が、あなたにあるの？」

女 2 「そんなことは興味ない。でもあなたはきつといつか絶対後悔する、私と同じように。自分のしていたことが壮大な徒労だと、そのために取り返しのつかないものをなくしてきたのだと気づくから」

女 4 「いつかくる、未来の責任なんかとれないくせに。これから先の私に興味なんかなくせに。仕事だからって私のこれからすべてがわかったようなふりをして。無責任な教師みたいなこといわないで」

女 1 「仕事だったらこんなとこまで付き合うか。100%もう自己満足ですよ、言われた通り。でもって、自己満足だから計算度外視だ、とことんつきあってやる、そっちが嫌がってもな」

女 2 「本当はね、ひよっとしたらもう、あなた達は逃げ出せるのかもしれない。逃げてもいいのかもしれない。でも今こんな世界で、自分を鏡で見つめるよ。ものすごく惨めで気持ち悪いから。ファンタジーに得意になって自分を慰めて時々気づいて自己嫌悪して、でもやめられないまま」

女 4 「そんなの知ってるし、知ってた」
女 2 「そう。そして私は、それでもやめられなかった。母が死ぬと告げに來られて、私のせいで死ぬとなじられて。二日間眠れなくて考えてその結果、無意識に偶然扉を開けるまで」

女 4 「あなたに訪れた奇跡を、私に期待しないで。私まで巻き込まないで」

女 1 「まあ、とりあえず先輩として、出てきたらアドバイスくらいはしてやるよ。世の中と上手いことやっけていけたりいかなかったり交渉するテクニク。すごいぞお。ピンからキリまで、アツと驚く方法が満載だ」

女2 「貴方の人格なんか知らない。家族のことも、過去も、これからの人生も知ったこっちゃやない。けど、今、とりあえずこんな形で出会った私達は、偶然あなたをその価値観から引きずり出そうとしている。死に物狂いでやろうとしている。もし今、あなたとわたしが本当に対話して、そのことに価値を感じられたなら、もし今、この言葉が通じたのなら、さあ、手をつかんで」

舞台全体が明るくなっていく。輝度が最高になって、暗転。

第九場

舞台が明るくなる。女1・2がデスクのパソコンにうずくまっている。どちらも苦しそうな様子。

女2 「今日の二日酔いはダウンナー系なんですネ」

女1 「うるさい、ごめんなさい、しゃべらないで。気持ち悪い・・・」

女2 「最近同感することが多くなったのって、歳なんですかね」

女1 「そうやって歳とったふりしていると本当に心が老けてっちゃうんだよ、実例が言うんだから間違いない」

女2 「わかりましたけど、とりあえず仕事は？」

女1 「今日明日中に期限のやつあります？」

女2 「えー、確か、3つほど」

女1 「まじか・・・」

女2 「延長依頼してみますか？」

女1 「できそう全部？」

女2 「全部無理そう」

女1 「ですよね」

女2 「まあ、せいぜい頑張ってください。」

やや、間

女1 「そういえばさ、あの依頼は、どうなったんだっけ。引きこもりさんの。

あ、違うか、引き不明さんだ」

女2 「ああ、あれ」

女1 「そうそう。調査して報告して、だっけ？それから？」

やや、間

女2 「一応それで終わりかと。何も言ってきてないんで、向こうから」

女1 「ああ、そっか、うん」

女2 「ただ、ですわね」

女1 「うん？」

女2 「なんか、なんとなく、うまくいったような気がしてます。確信に近いくらい。勝手な、自己満足なんだけど」

女1 「そっか、うん」

やや、間

女1 「あの、さ。そうやって予防線引いてからのコミュニケーションも、そろそろ見直していいころよ。結局、伝わってるかなんてわかりやしなないし、それはそれでいいじゃん。正解かどうかは、振り返らなくてもさ。やることやったよ、やれるだけ」

やや、間

女2 「ありがとうございます。でも、いいんです。私、全然失望してるわけじゃないんで、会話に。結局、なんだって最後は自己満足なんで、でもそこから、私はつながっていけてるんですから、今」

女1 「ふーん、そっか。そうなんだ」

女2 「なんですわ」

女1 「ううん、別に」

女2 「いやほんと、何なんですわ、気持ち悪い」

女1 「別について。さあ、お仕事頑張ろうかな」

女2 「はいはい、そうですわ。じゃあほら、働きましょう（仕事の書類を渡しながら）生きてく限り、前見ていかないと、なんとか」

女1 「うえーい」

舞台が暗くなり、下手より女4登場。

女4 「だれかの役に立ちたいという言葉が、昔からずっと不思議だった。そんなことをして何になるのだろうと思っていたし、今でも思っている。だって、人は人で私は私で、私は私の利益になることが最優先なわけ。だそりゃあ自分に害のない余裕の部分で困ってる人を助けたりしても別にいいけれど、それより自分のことのほうがずっと大事。だって私は、まだまだ不完全な哲学的ゾンビなのだから、その完成度を高めなくちゃ。だから、自己犠牲とか利他心とか宮沢賢治とか、気持ち悪くて理解不能で、要は自己満足がしたいから以上には感じられなくて、軽蔑していた。でも、多分、生きていくというのは結局、その自己満足を肯定していく

過程なのかもしれないと思う。陳腐すぎて失望するけれど、それでも捨てきれなかった私の承認欲求は、確実に他者を必要とするわけで。少なくとも、その他者は幻想ではないという認識が欲しいわけで。どうやらそれは、他者への影響を前提とする、らしい。悔しいけれど、私はまだやはりゾンビではなくて、そして、気持ち悪いけど、それがちよつと、慰めだったりする。私のこの気持ちだが、今、声になり、電子に乗り、どこかの誰かに確実に届いて、そして何かを与えられたという確信があるいは妄想が、多分私の価値になる。・・・その営みがまだ、意味を持つと感ぜられるうちは。意味があつてほしいと、願っているうちは。私は、私自身のために、あなたと、話し続けたいのかもしれない。私は、私自身のために、あなたと、生きていたいと、願っているのかも、しれない」

終